

滋賀が心のふるさと

今回、みみタロウは、滋賀の風景をモチーフに絵を描いている画家の麦耀明さん(大津市在住)をご自宅に訪ね、絵を見せていただきながらお話を伺いました。



20年前、絵の修行のため、二度と祖国の地を踏まない覚悟で、トランケー一つで日本にやってきました。

私は中国の広州で中学生だった時、美術部の指導をしていた墨絵の師匠に出会い、個人的に絵を学んでいました。墨絵は中国が本場ですが、芸術は異質なものに触れることで新しいものを生みだします。中国文化とは似ているけれど、異質で新しい部分も持ち合わせている日本文化へのあこがれと師匠の薦めもあって、21歳で日本に新たな絵の可能性を求めて来日しました。大学で絵の勉強をするために、私の場合、日本語を一から勉強して、日本人と同じ受験をしなければなりません。昼間は日本語学校で学び、夜には生活費をかせぐため、アルバイトをする生活。お金は一ヶ月分の生活費しか持参していなかったもので、来日3日後から働き始めました。今から考えると若かったからできた大冒険。でも楽しい思い出ばかりです。私は人間運がいいのか、とてもいい人たちばかりと出会いました。アルバイトは居酒屋の店員。人間相手の仕事の方が言葉や文化を早く覚えられると思ったからです。お客さんも親切で、最初は、注文も取れない私に代わって伝票を書いてくれ、読み方も教えてくれる人も。夜中12時の終業後の晩ご飯では、店長が毎日その日の新聞を読んで、私に日本語を教えてくださいました。日本語ができなければ大學に行けないので、無我夢中で勉強。末っ子で甘やかされて育った私にとって精神的な試練の日々でした。日本画の画材の美しさに感動し、京都の精華大学の日本画を専攻。本格的に絵の勉強をするため、さらに大学院に進学し、卒業後は、水墨画、墨彩画、日本画を教えるようになりました。

絵の題材を探す内に滋賀を知るようになりました。滋賀の水と山と畑がある田舎の風景に出会い、正にこれこそが自分の理想とする風景だと思いました。生涯をかけて描いていくモチーフをここにを見つけ、そしてこの自然の中で

生活したいとの思いから、6年前に京都から大津に引っ越してきました。今、何よりの楽しみは、暇さえあれば、おにぎりを持って、近くの畑で過ごす一時。琵琶湖や周りの山々を眺めると、いろんなことがあっても心が満たされます。そしてあちこち出かけては、高島や小野などの滋賀のふるさとの風景や琵琶湖の風景を描いています。四季折々の琵琶湖をぐるっと360度見渡すパノラマ画も描いていて、推定最終15枚の連作の内、今4枚が完成しています。私は、自然の美しい風景を残したいという思いでいつも風景画を描いています。自分の暮らしか思いを込めて描く絵は、見る人とのコミュニケーションの手段です。絵を見る人がそれぞれに受け止め、ほっとした気持ちになってくれれば、そして多くの人に滋賀の美しさを知っていただければ何より嬉しいです。

しかし、のどかな滋賀の風景も、絵を一枚描く間にもどんどん畑がビルになって消えていき、とても悲しい気持ちになります。人間は、生きていくために経済を発展させなければなりません、それによって美しい自然を破壊してしまう、という大きな矛盾を抱えながら暮らしています。特に3月の福島原発事故は環境を大きく破壊し多くの人々を苦しめています。私には何の力もありませんが、少しでもお手伝いしたくて、絵画教室のメンバーに呼びかけ、4月に手作りの品や絵を販売するチャリティーバザーを開催しました。僅かな金額しか寄附できませんでしたが、人々に連帯をアピールできて良かったです。また機会があれば、何度でも開催したいと思います。

私は来日当初から、自分が外国人だと考えたり、そう感じたりしたこともなく、あまりそのことを意識しなかったから、かえって日本に溶け込みやすかったのかもかもしれません。ただ唯一少し違うと感じるのは、中国人と日本人のコミュニケーションの仕方。中国人はとてもストレートにものを言います。男の友情のように、お互いの考えを言い合っただけでぶつかりながら友情を深めていきます。日本人相手だと私も時々まだ「言い過ぎたかな」と反省するんですよ。

美しい滋賀に住む私たち。自然の恵みに触れ、心豊かに暮らしたいですね。